奈良市埋蔵文化財調査センター紀要

1996

奈良市教育委員会

目　次

横井廃寺の軒瓦について

Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　横井廃寺についての研究史 …… 2
Ⅲ　近年採集された瓦類 …… 6
Ⅳ　横井廃寺出土軒瓦の集成と分類 …… 12
Ⅴ　おわりに …… 24

横井廃寺の軒瓦について

原田　憲二郎
島軒　満（当センター調査補助員）

Ⅰ　はじめに

大和盆地の東辺、春日山の西麓付近は、山辺の道に沿って古代寺院が密に分布する地域として知られる。本稿で扱う寺院遺跡は周辺の古市廃寺、山村廃寺等とともにこの地域を代表する寺院遺跡の一つで、奈良市の東南部、藤原台の東北丘陵上に位置する[1)]。（図１）寺院遺跡は丘陵を開いたような狭い平坦地にあり、現在は水田、住宅地となっている。北側は丘陵が続き、南側は谷間を地蔵院川が流れ、西側は西へ下る傾斜地となっている。辺りには、俗称「ヤケモン」、「カネツキアト」、「センボー」等の地名が残るという[2)]。寺名は「中臣寺（法光寺）」、「藤原村廃寺」、「横井千坊廃寺」、「横井廃寺」と呼称される。以前から古瓦が散布しており、礎石も残っていたことから、寺院遺跡と考えられてきたが、

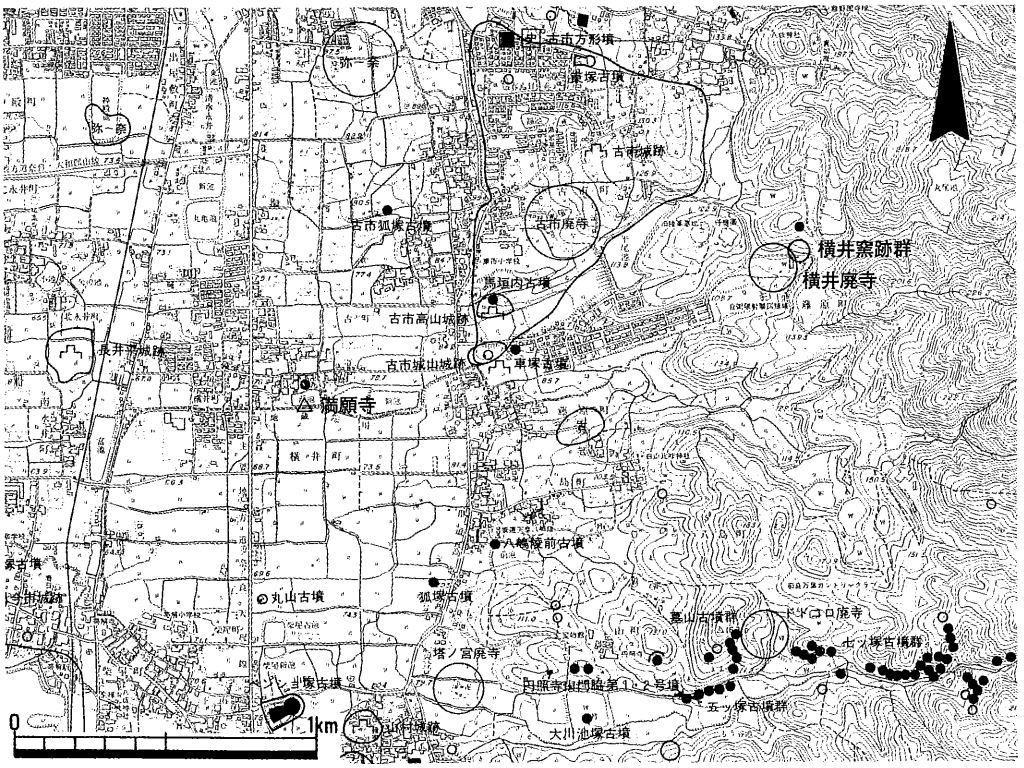


図１　位置図（1/25,000）

発掘調査は行われておらず、不明な点が多い。

本稿では、1993年3月に推定金堂跡南側の水田の一部が、東西に削平された直後に、当地で鎌中俊行氏、黄振安氏、田中利弘氏、島軒満が表採した瓦資料を紹介する。また現在までこの寺院遺跡について報告されている研究をまとめ、主に軒瓦を中心に、若干の考察を試みたいと思う。

Ⅱ　横井廃寺についての研究史

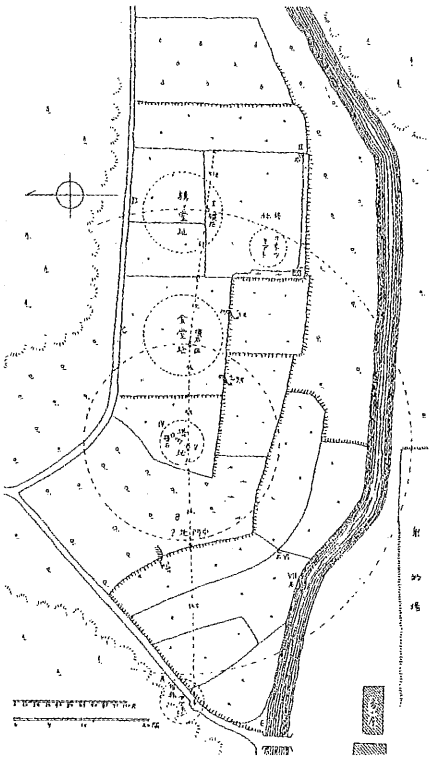
ここでは、本廃寺に関する研究をまとめ、一、二の考察を行う。

1895（明治28）年、当時の東市村住民が本廃寺を開墾中に金銅製観世音菩薩立像1体、蓬莱山双鸞鏡1面、銅鋺1個、和同開珎、萬年通寶、隆平永寶、刀装具などを発見したという。そのことについて、1906（明治39）年に高橋健自氏が「中臣氏の氏寺及びその遺址」と題して報告した。また、採集された軒丸瓦3点、軒平瓦1点をスケッチにて報告している。高橋氏はこれらの出土品や瓦から天智・天武朝創建の寺院遺跡と考えた。そして寺院遺跡西に隣接する「藤原村」という村名から、『尊卑分脈』の巻一に記されている「法光寺本願、号中臣寺、在大和国添下郡」の記事や、『拾芥抄』法光寺の條に記されている「在大和国、大織冠氏寺元名中臣寺、今名藤原寺」の記事にある中臣寺（藤原寺）に比定した[3]。なお、この寺院遺跡は添上郡に所在しており、『尊卑分脈』にある「在大和国添下郡」というところと符合しないが、高橋氏はこれは「添上の誤記ならむと覚ゆるなり」と述べている。

1927（昭和2）年、榧本亀次郎氏は「大和添上郡発見の金銅佛等について」と題して、高橋氏が報告した金銅製観世音菩薩立像をはじめとする出土遺物について詳細な報告を行った[4]。しかし不思議なことに、これらの出土遺物は「添上郡帯解村大字山村字ドドコロに於て土取作業中に一農夫によって偶然発見されたものであるといふ」と記し、本文註を付して「遺物を収めた箱書及荻田氏（当時奈良県添上郡東市村字横井の荻田元平氏）談による。」と記す。（）内筆者。さらに「岸熊吉氏が車輪形石造品の発見から端緒をえて、そのドドコロを発掘されて多くの遺物を獲られたが如きは、これらの遺物の発見地の傳へに一の確実性を與へるかに感ぜられて興味の深いものがある。」と記す。この報告から金銅製観世音菩薩立像等は、本稿で扱う寺院遺跡からではなく、山村廃寺[5]から出土したものということになる。

1928（昭和3）年、保井芳太郎氏は『大和古瓦圖録』のなかで、「藤原村廃寺」と呼称して、採集軒丸瓦1点を写真で紹介している[6]。

1930（昭和5）年、石田茂作氏が編集した『古瓦図鑑』のなかでは、「横井廃寺」と呼称



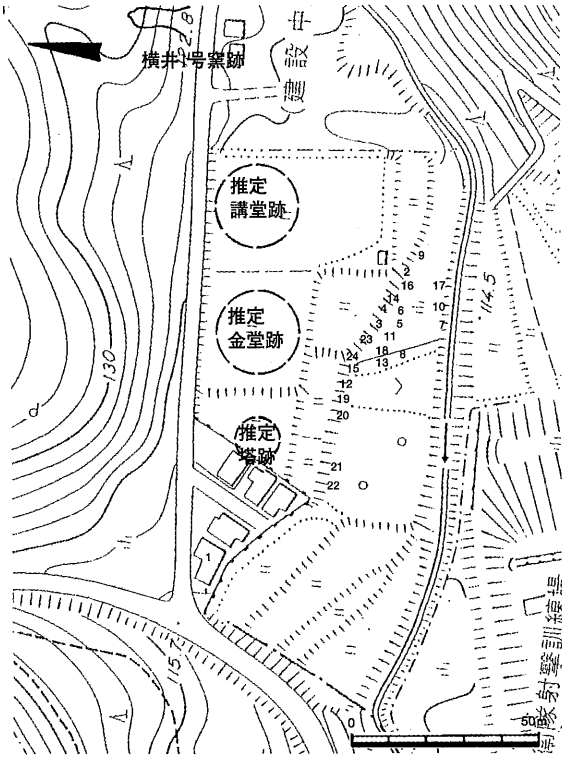


図２　石田茂作氏の推定伽藍配置図（左）と図３　軒瓦採集地点図（右・番号は図版５・６の番号に対応）

して、軒丸瓦３点、軒平瓦２点を写真で紹介している[7]。

1932（昭和７）年、保井芳太郎氏は『大和上代寺院志』を著した。「中臣寺（横井廃寺）」と呼称して、高橋氏の中臣寺に比定する説に「概ね従ふべきものであらう。」と述べている。さらに聞き取り調査から、かつてここに土壇が遺存していたことを報告して、東に塔、西に金堂という伽藍配置を推定した。また採集した軒丸瓦11点、軒平瓦４点、鬼瓦１点を写真で紹介した[8]。

1936（昭和11）年、石田茂作氏は『飛鳥時代寺院址の研究』のなかで「横井廃寺」と呼称して、瓦の散布状態、礎石の位置、地名などから中門、塔、金堂、講堂が一直線に並ぶ、西面する四天王寺式伽藍配置と推定した。（図２）　また、過去に採集された軒瓦を拓本、写真で報告し、軒丸瓦19種類、軒平瓦８種類の計27種類に分類した。他に横井廃寺採集資料として、岩井孝次氏蔵の紋様塼２点を拓本で報告している。これは塼の側面部にのみ、幾何学紋を飾るわが国では特異なものである。石田氏はこれらの軒瓦、金銅製観世音菩薩立像から飛鳥時代の創建寺院と考え、高橋健自氏の「中臣寺」に比定する説を疑問視している[9]。

上述したように、石田氏は四天王寺式伽藍配置と考えているが、筆者は、推定講堂跡の北側には瓦窯が目前にあり、南側では谷になっていることからおそらく回廊は巡っていな

かったものと推察する。なお、石田氏は金銅製観世音菩薩立像以下の出土品について、「明治二十八年十一月開墾の當時、前述金堂址から発掘したと云ふ金銅佛以下のものが、今同村の荻田穣氏宅に蔵せられている。」と報告しており、前掲した榧本氏の報告と異なる。これらの出土品は、高橋氏、石田氏とそれ以外の横井廃寺についての文献にある横井廃寺出土とする説と、榧本氏の山村廃寺出土とする説の二説があることになる。榧本氏の報告年は高橋氏報告に次いで出土品の発見年に近く、出土品の箱書まで詳述していることから簡単に誤記とは考えにくい。このことは、金銅製観世音菩薩立像等の遺物を以って、横井廃寺について論ずる際には、注意すべき問題と思われる。

1937（昭和12）年、岩井孝次氏は『古瓦集英』のなかで「横井千坊廃寺」と呼称して、軒丸瓦7点、軒平瓦4点、紋様塼2点を写真で報告し、紋様塼は紋様の復元を行っている[10]。

1948（昭和23）年、福山敏男氏は『奈良朝寺院の研究』の「中臣寺」の文中で、正倉院文書天平十四年の「出家人貢進解」のなかに「中臣寺」と記載があることから、『拾芥抄』法光寺の條に記されている中臣寺から藤原寺に名称を改めたということは誤りで、中臣寺と藤原寺は全く別寺院であると指摘している。さらに高橋健自氏がかつて本廃寺を地名から「中臣寺（＝藤原寺）」に比定したことについて、「これは中臣寺と藤原寺とを同寺とする説に引かれて、藤原の地名を中心にして推測されたものであるから、既に立論に誤があり、それは或は藤原寺ではあるかも知れないが、中臣寺ではあり得ないであらう。」と述べている[11]。

1960（昭和35）年、本廃寺の西約700mの場所にある古市廃寺の発掘調査が行われた。本調査に先立つ測量時に、飛鳥時代の軒丸瓦、鴟尾の破片などが採集されたことが当時の新聞に写真で掲載されている[12]。今回、本稿の資料収集にあたり、これらの遺物の採集者である西川廉行氏への聞き取り調査を行うことができた。聞き取り調査の結果、驚いたことに、当時の新聞に掲載されている表採品の一部である軒丸瓦1点、軒平瓦1点、鴟尾片などは古市廃寺ではなく、本廃寺で採集されたものであることが判明した[13]。現在まで詳細な報告はされていない遺物であるので、ここで簡単に紹介する。（図4）

1は単弁八弁蓮華紋軒丸瓦である[14]。推定講堂跡東側にて表採されたものという。縁の丸いやや突出した中房に蓮子を1＋4配する。弁先端は角張り、弁端に珠紋を置く。外縁は素紋で上面が丸みを帯びる。瓦当裏面中央は不定方向にナデを施し、裏面下端の縁辺部及び瓦当側面は外周に沿ってナデを施す。焼成堅緻で青灰色を呈し、胎土は緻密である。

2は唐草紋軒平瓦である。推定中門跡南側にて表採されたものという。小破片であるが、唐草は巻の強い2葉が連続し、上外区に珠紋帯がある。平瓦部凸面に格子叩き目を残す。焼成軟質で黄灰色を呈し、胎土はやや粗い。

3は鴟尾の頂部破片[15]である。軒丸瓦と同じく推定講堂跡東側にて表採されたものという。

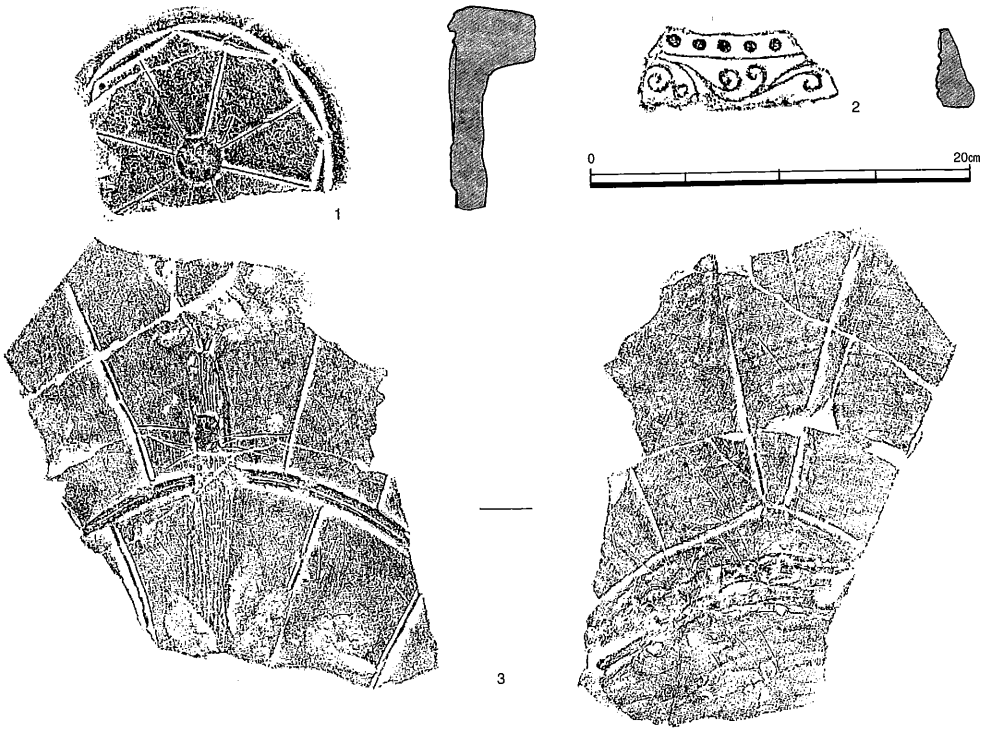


図4　西川廉行氏所蔵　横井廃寺出土軒瓦（1/4）・鴟尾（1/8）

鰭部内外面には幅6㎝から10㎝の正段型を削り出す。幅約1.5㎝の断面台形の縦帯を貼り付けて、胴部と鰭部を区画する。脊梁部は幅約3㎝の突帯を、接合面にキザミをいれた後に貼り付けている。鰭部外面は縦方向にナデを施し、内面はナデ及びハケ状工具にて縦方向に調整を行っている。胴部厚約3.5㎝、鰭部厚約2.5㎝を測る。焼成軟質で外面黒灰色、内面明橙色を呈し、胎土は緻密である。この鴟尾は段型や縦帯の幅が飛鳥寺例[16]より幅広く、互い違いに段型を表さない点からみて、七世紀以降のものと考えられる。しかし七世紀中頃の高丘三号窯例[17]に見られるように沈線のみで段型を表現するほど後出的でもない。以上のことから、この鴟尾の時期は七世紀前半から中頃のものであろうとおもわれる。

1960年の調査以来、古市廃寺は飛鳥時代寺院と考えられてきた。しかし、その根拠の一つである遺物が古市廃寺採集品ではないと判明した。また、1990（平成元）年に奈良市教育委員会によって、古市廃寺の西面回廊が予想される場所で発掘調査が行われたが、飛鳥・白鳳時代に遡る軒瓦は無かったと報告されている。[18] これらのことは古市廃寺は本当に飛鳥時代寺院であるのかという疑問を投げかけるものである。今回明らかになった事実は、本廃寺だけでなく、古市廃寺の創建年代を考える上でも、重要な問題を含むものであろう。

1974（昭和49）年、京都国立博物館から『瓦と塼図録』が出版された。このなかで「横井廃寺」と呼称して、軒丸瓦2点、軒平瓦1点を写真と実測図で報告し、それらの軒瓦の組

合せ関係についても指摘されている[19]。

1985（昭和60）年、本廃寺のすぐ北東にある四基の窯から成る横井窯跡群が、盗掘された。このため窯体の残存状況を確認し、保存対策を探る目的で奈良市教育委員会により1号窯跡の発掘調査が行われた[20]。調査の結果、焚口部と燃焼部はほとんど破壊され、焼成部の一部と煙出しが残るのみの状態であったが、窯体は地山を掘り抜き、床に段を設けた地下式有段の登窯と判明した。床面は4面あり、当初は瓦を焼成していた可能性が高く、その後窯壁の改修を行い、須恵器を焼成するようになったと報告されている。出土した遺物には丸瓦、平瓦、須恵器がある。また、調査中に調査地付近で鴟尾の一部と思われる破片数点と軒丸瓦1点が採集されている。この1号窯の構築年代は遺物から、七世紀第2四半期と報告されている。その後、七世紀後半でも比較的古い時期に須恵器窯に替えられ、床面に残された資料から、八世紀初頭を前後する時期まで焼成が継続されたと推察されている。

1991（平成2）年、森郁夫氏は『続・瓦と古代寺院』で「横井廃寺」と呼称して、いくつかの指摘を行った[21]。横井廃寺の創建年代については、中宮寺の創建瓦との比較から620年代頃と考えている。ただ、飛鳥時代軒丸瓦の種類が少ないことから、短期間で伽藍が完成した訳ではなく、長期間かけて造られていったものと指摘している。白鳳時代では、法隆寺式軒丸瓦がみられることから、横井廃寺を造営したこの地の氏族が、法隆寺造営に関わりを持っていたと見ることもできると指摘している。さらに奈良時代の軒瓦では、平城京内の官寺の軒瓦と同笵のものがいくつか見られることは、当時の造営機構を考えると、注意を要する問題と指摘している。

本稿ではこれら先学の成果[22]を援用して、本廃寺について、主に軒瓦から考えて行きたい。

なお、研究史で述べてきたように本稿で扱う寺院遺跡は「中臣寺（法光寺）」、「藤原村廃寺」、「横井千坊廃寺」、「横井廃寺」と様々に呼称されてきた。しかし史料にある「中臣寺」と呼称するには、未だ確証が無いので不適当であろう。1970年以降、最近のほとんどの論文、図録が「横井廃寺」と呼称している。ゆえに本稿でも本廃寺を「横井廃寺」と呼称して論を進めていくことにする。

次章からは近年採集された軒瓦を紹介すると共に、不明な点が多いこの寺院について一、二の私見を述べていきたい。

Ⅲ　近年採集された瓦類

ここでは、近年採集された軒瓦、紋様塼について紹介する。（図5・6）これらの資料はすべて採集地点と採集年月日が明らかなものである。1は田中利弘氏、3は黄振安氏、

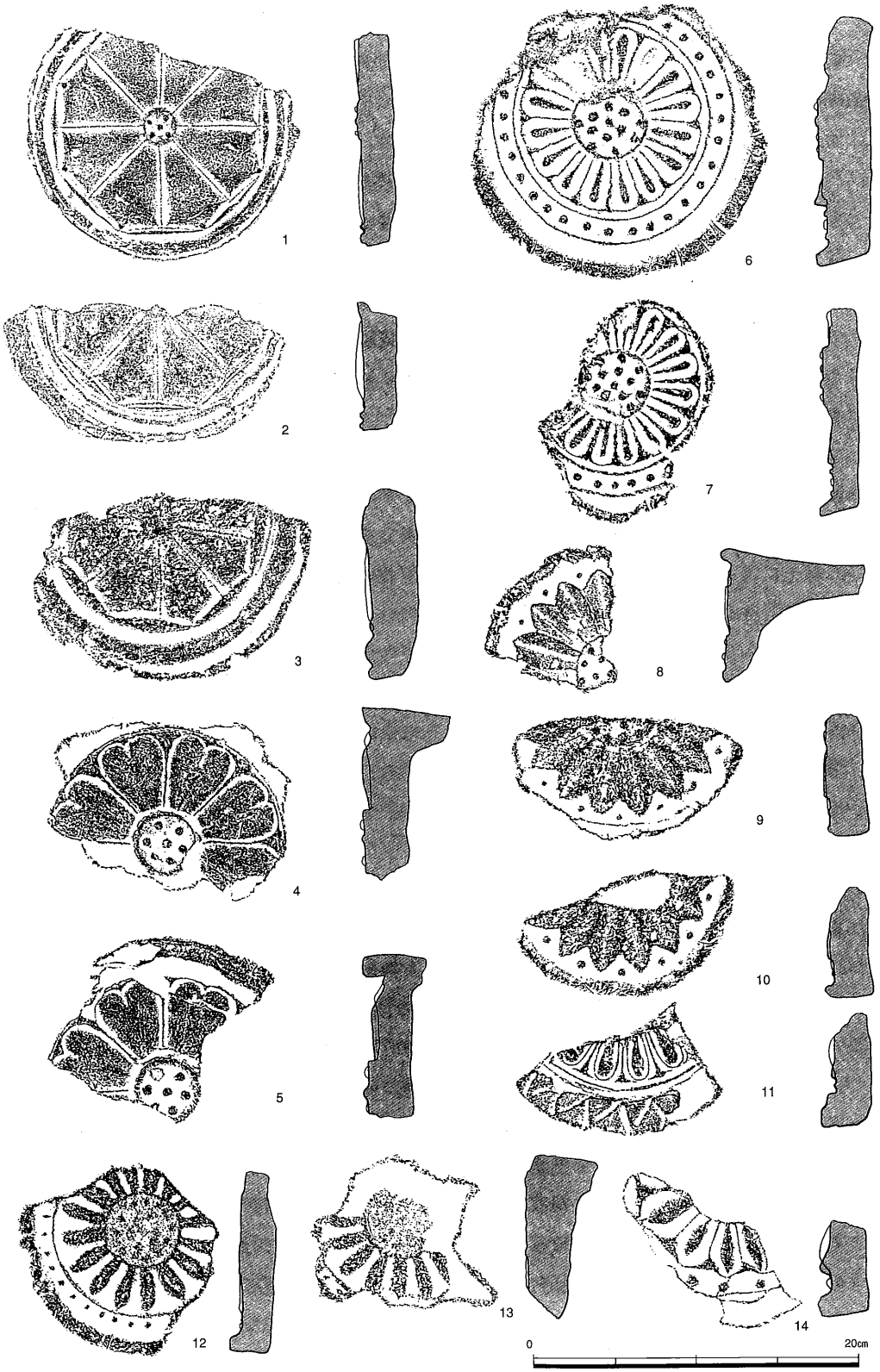


図５　横井廃寺採集軒瓦（1/4）

軒瓦6は鎌中俊行氏が採集し、それ以外のものはすべて島軒の採集資料である。瓦の出土場所はそれぞれ図3のとおりである。

1、軒丸瓦（図5－1～14）

1は単弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。縁の丸いやや突出した中房に蓮子を1＋4配する。蓮弁は肉薄で中央がわずかに盛り上がる。弁先端は角張り、弁端に珠点を置く。外縁は素紋で上面が丸みを帯び、断面蒲鉾形を呈する。瓦当外縁上に笵端痕が明瞭に確認できる。外縁と界線の間に2箇所、及び蓮弁端部1箇所に笵傷が確認できる。瓦当裏面中央は平坦で、不定方向にナデを施す。瓦当裏面の下端縁辺部に強いナデを施し、一段低くなっている。瓦当側面は外周に沿って丁寧なナデを施す。焼成堅緻で灰白色を呈し、胎土は緻密である。

2は単弁蓮華紋軒丸瓦である。縁の丸いやや突出した中房をもつ。弁数及び中房の蓮子数は不明である。蓮弁は肉厚で、中央が盛り上がるが稜は無い。弁先端は角張る。弁端に珠点状の高まりがあるが、珠点かどうかは不明である。外縁は素紋の直立縁である。瓦当外縁上に笵端痕が明瞭に確認できる。外縁と界線の間に2箇所、及び外縁上に1箇所笵傷が確認できる。瓦当裏面は平坦で、不定方向にヘラケズリののちナデを施す。瓦当側面は横方向にヘラケズリののちナデを施す。瓦当面の笵外粘土を横方向にヘラケズリする。また、瓦当面に指ナデ痕が確認できる。焼成堅緻で暗茶褐色を呈し、胎土は緻密である。

3は単弁蓮華紋軒丸瓦である。やや突出した中房をもつ。弁数及び中房の蓮子数は不明である。蓮弁は肉厚で中央が盛り上がる。蓮弁の幅は各弁で異なり、不揃いである。弁先端は角張る。弁端に珠点を置くものかどうかは摩滅が著しいため不明である。外縁は素紋で幅広い。瓦当外縁上に笵端痕が確認できる。瓦当裏面は中央がやや盛り上がり、不定方向にナデを施す。瓦当側面は横方向にナデを施す。焼成軟質で茶褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み粗い。

4・5は同笵品で単弁蓮華紋軒丸瓦である。突出した中房に蓮子を1＋6配する。蓮弁は弁端が桜花状に切れ込み、中央に稜をもつ。間弁は楔形で、蓮弁の周囲を界線状に巡る。外縁は素紋の直立縁である。蓮弁端部には1箇所笵傷が確認できる。瓦当裏面は不定方向にナデを施す。丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリののちナデを施す。焼成堅緻で青灰色を呈し、胎土は緻密である。

6・7は同笵品で単弁十六弁蓮華紋軒丸瓦である。突出した中房に蓮子を1＋6＋8配する。蓮弁は細長く、丸い弁端に向かってやや肉厚となる。間弁は楔形で、蓮弁の周囲を界線状に巡る。外区内縁は珠紋を巡らし、外区外縁は素紋の傾斜縁である。6は焼成軟質で赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。7は6に比して瓦当が薄手で、瓦当裏面は不定方向にナデを施し、側面は横方向にナデを施す。焼成堅緻で、灰白色を呈し、胎土は緻密である。

8・9・10は同笵品で単弁蓮華紋軒丸瓦である。弁数及び中房の蓮子数は不明であるが、やや突出した中房に蓮子が二重に巡ることがわかる。蓮弁は中央が薬研状にくぼみ、弁端が尖る。蓮弁相互の間に類似の蓮弁「覗花弁」がある。弁間に珠点を置く。外縁は素紋の直立縁である。8は瓦当裏面から丸瓦部凹面にかけて縦方向に強いナデを施す。丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリののちナデを施す。焼成堅緻で暗灰白色を呈し、胎土は緻密である。9・10は焼成軟質で赤褐色を呈し、胎土は緻密である。

11は単弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮弁は短く、先端の丸い肉厚な子葉を細い輪郭線で囲む。間弁は楔形である。外区には一本の圏線を巡らす。外縁は面違鋸歯紋を巡らす傾斜縁である。瓦当側面には、瓦当基底面と同一レベルに笵端痕が明瞭に確認できる。瓦当裏面、及び側面は横方向にヘラケズリする。裏面下端は縁辺部を横方向にヘラケズリし、面取りする。焼成堅緻で灰白色を呈し、胎土はやや粗い。

12・13は同笵品で単弁十六弁蓮華紋軒丸瓦である。中房は平坦で、蓮子数は摩滅が著しく、不明であるが、蓮子が二重に巡ることがわかる。蓮弁は細長く平坦で、弁端がやや丸みを帯びる。外区内縁は珠紋を巡らす。外縁は素紋の直立縁で、やや内傾する。12は13に比して瓦当が薄手である。瓦当側面には瓦当基底面とほぼ同一レベルに笵端痕が確認できる。13は瓦当裏面から丸瓦部凹面にかけて縦方向に強いナデを施す。2点ともに焼成軟質で赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。

14は単弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮弁は中央が高く盛り上がり、弁端が尖る。間弁は楔形で、弁端が蓮弁同様高く盛り上がる。外区内縁は珠紋を巡らす。外縁は素紋の直立縁で、やや内傾する。珠紋の1つには明瞭に笵傷が確認できる。瓦当裏面は縦方向にヘラケズリののちナデ、側面は横方向にヘラケズリののちナデを施す。焼成堅緻で暗灰色を呈し、胎土はやや粗い。

2、軒平瓦（図6－15～22）

15は三重弧紋軒平瓦である。瓦当面は平瓦の円弧に沿って弧線が施紋され、第1弧線に比して、第2、第3弧線は若干太い。顎の形態は粘土帯を張り付けて成形した段顎である。平瓦部凹面の瓦当近くは摩滅が著しく、調整は不明だが、以下は未調整で、布目圧痕、模骨痕を残す。焼成軟質で暗灰色を呈し、胎土はやや粗い。

16～18は均整唐草紋軒平瓦で、過去に横井廃寺で採集されている資料[23]を見ると、3点ともに同笵であると思われる。中心飾りは蕨手状の唐草を背中合わせにしたもので、唐草は巻の強い2葉を左右に連続して反転させる。上外区に珠紋を巡らす。顎の形態は段顎で深い。平瓦部凹面は瓦当近くを横方向にヘラケズリし、以下は未調整で布目圧痕、模骨痕を残す。平瓦部凸面は顎の近くに、横方向のナデを施す他は、未調整で全体に格子叩き目を残す。16・18は焼成堅緻で灰白色を呈し、胎土は緻密である。17は焼成軟質で赤褐色を呈

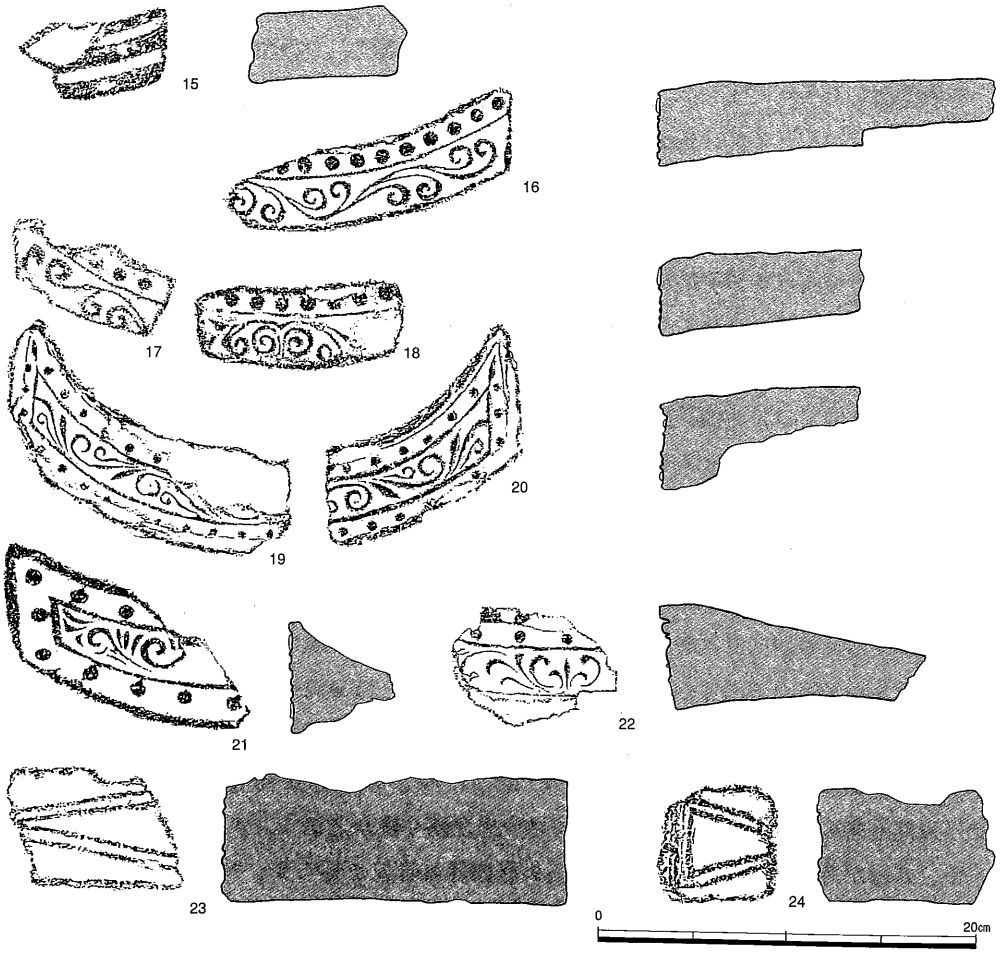


図６　横井廃寺採集軒瓦・紋様塼（1/4）

し、胎土はやや粗い。

19・20は均整唐草紋軒平瓦である。過去に横井廃寺で採集されている資料[24]を見ると２点とも同笵であることがわかる。唐草は上下の外区界線から流れるように派生し、第三単位主葉の先端は脇区界線に接する。上下外区、及び脇区に珠紋を巡らし、上外区と脇区の境に杏仁形の珠紋を置く。顎の形態は段顎である。平瓦部凹面は瓦当近くに横方向のヘラケズリののちナデを施し、以下は縦方向のヘラケズリののちナデを施す。平瓦部凸面は顎部と顎の近くに横方向のナデを施し、以下は未調整で縦位の縄叩き目を残す。２点ともに焼成堅緻で青灰色を呈し、胎土は緻密である。

21は唐草紋軒平瓦である。唐草は左第二単位の一部と左第三単位を残すのみである。左第三単位主葉は脇区界線に接しない。一単位あたりの主葉には、三つの支葉が伴う。上下外区及び脇区には珠紋を巡らす。外区珠紋帯の４箇所に笵傷が確認できる。焼成軟質で赤褐色を呈し、胎土は緻密である。

22は均整唐草紋軒平瓦である。中心飾りは逆小字形で、基部の端は下外区の界線に接しない。上下外区に珠紋を巡らす。顎の形態は直線顎である。平瓦部凹面は瓦当近くを横方向にヘラケズリし、以下は未調整で布目圧痕を残す。平瓦部凸面は縦方向にヘラケズリする。焼成堅緻で暗灰色を呈し、胎土は緻密である。

3、紋様塼（図6－23・24）

23は塼の側面部に幾何学紋をレリーフ状に表現した紋様塼である。残存長10.6cm、幅18.6cm、厚さ6.0cmである。紋様は左側欠損部の中央から右側端部に向かって広がる二重の放射状紋を幅0.6cm、高さ0.2cmの凸線で表し、紋様面上端及び下端には幅0.6cm、高さ0.3cmの外郭線が巡る。上面は紋様面に直行する方向にナデを施し、一部紋様面に並行してナデを施す。下面は紋様面に並行してナデを施す。紋様面に対する側面はナデを施すが、一部未調整で、指頭圧痕が確認できる。焼成軟質で、外面黄白灰色、内面灰白色を呈し、胎土は内面小石混じりで粗いが、紋様面は比較的緻密である。

24も23と同じく塼の側面部に、幾何学紋をレリーフ状に表現した紋様塼である。残存長6.5cm、残存幅10.2cm、厚さ6.2cmである。紋様は左側端部近くを底辺とする二重の三角形紋を幅0.6cm、高さ0.2cmの凸線で表す。紋様面上端、下端はともに摩滅が著しく、外郭線の存在は不明である。上下面及び左側面は、紋様面に直行する方向にナデを施し、左側面の一部に斜めにハケメを施す。紋様面左端の外郭線と、三角形紋の間に2箇所の笵傷が確認できる。焼成軟質で、外面黄白灰色、内面灰白色を呈し、胎土は内面小石混じりで粗いが、紋様面は比較的緻密である。

23・24の2点ともに各面の破損状況や粘土の剥離痕跡を見ると、型枠の隅に押しつぶされたような痕跡の粘土が認められる。また、全体に不定形大の粘土塊の剥離が顕著に見られることから、成形に際し型枠または箱状の容器を使用し、不定形大の粘土塊を詰め込んで成形を行っているものと考えられる。

横井廃寺出土の紋様塼は、すでに岩井孝次氏によって報告され、紋様の復元も試みられている[25]。その紋様復元案をみると、外郭線によって縁取られた紋様面は縦にのびる二つの珠紋帯によって大きく三つに区画され、中央の区画内に二重菱形紋、左右の区画内に二重三角形紋をそれぞれ表すことを想定している。しかし、今回採集した23の資料をみると紋様面と直行する右側面が残存していることから、放射状紋はこれ以上右に連続せず、菱形紋を形成しないことがわかる。ただし、23は施紋後に半裁したものである可能性や、岩井氏紹介のものと異笵である可能性もある。

この紋様塼の使用用途に関しては想定の域を出ないが、推定金堂付近での採集品であり、紋様塼という性格上、金堂内部の須弥壇など建物内部の装飾に使用された可能性が考えられる。

石田茂作氏は、岩井氏によって報告された横井廃寺採集紋様塼について「果たして當寺址から発見されたのなら実に珍品であるが、朝鮮出土のものではないかとの疑ひもあり、其の決定は寧ろ将来の研究に俟つべきものと思はれる。」と述べている[26]。このことについては、六十年前、岩井孝次氏によって報告されて以来、再び横井廃寺にて発見されたものであるから、横井廃寺出土のものであったことは疑うべきものではなくなった。

Ⅳ　横井廃寺出土軒瓦の集成と分類

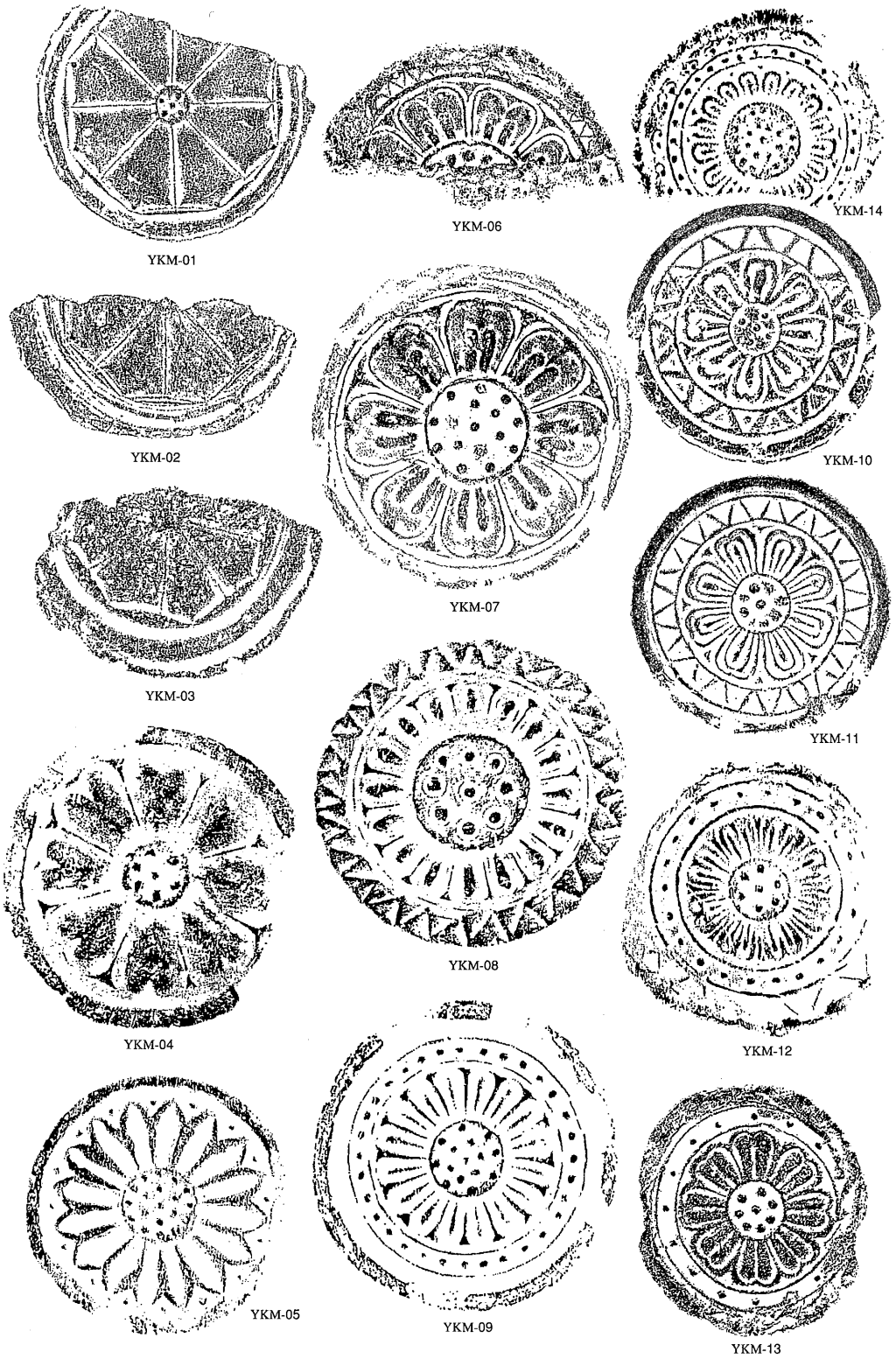
横井廃寺の軒瓦はすでに石田茂作氏によって分類されている[27]。さらにその後報告された資料、今回の新資料などを加えると計33種類に分類できる。内訳は軒丸瓦が21種類、軒平瓦が12種類である。（図７・８・９）これらの中には採集地点が明らかでなく、横井瓦窯群から出土したものも含まれているかも知れないが、以下に簡単に紹介する。なお文中の「ＹＫＭ」は「横井廃寺軒丸瓦」、「ＹＫＨ」は「横井廃寺軒平瓦」を意味する。

ＹＫＭ－01は単弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮子１＋４である。弁先端が角張り、弁端に珠点を置く点、弁幅が均一で、均等割付である点が特徴的である。この瓦はかつて姫寺廃寺出土例と同笵と言われていた[28]。しかし姫寺廃寺出土例の写真を見ると蓮弁に稜線を持ち、ＹＫＭ－01と異笵ではないかという疑問をもったため、実物照合を行った[29]。結果、姫寺廃寺出土例の蓮弁には稜線があり、高く盛り上がる点がＹＫＭ－01と異なっていた。しかし、ＹＫＭ－01の外縁と界線の間にある２箇所の笵傷が姫寺廃寺例と一致した。これらのことから、ＹＫＭ－01の蓮弁を彫り直したものが、姫寺廃寺出土例であることが判明した。また、両者には胎土、焼成、色調、瓦当裏面の調整の違いがあることが判明したことから、両寺の瓦工人の間で笵のみの移動が行われた可能性が指摘できよう。他に横井窯跡群に同笵例がある[30]。図４の１もこれと同笵である。なお、石田氏分類３[31]もこれと同笵と思われる。

ＹＫＭ－02は単弁蓮華紋軒丸瓦である。ＹＫＭ－01に似るが、弁中央が盛り上がる点が異なる[32]。

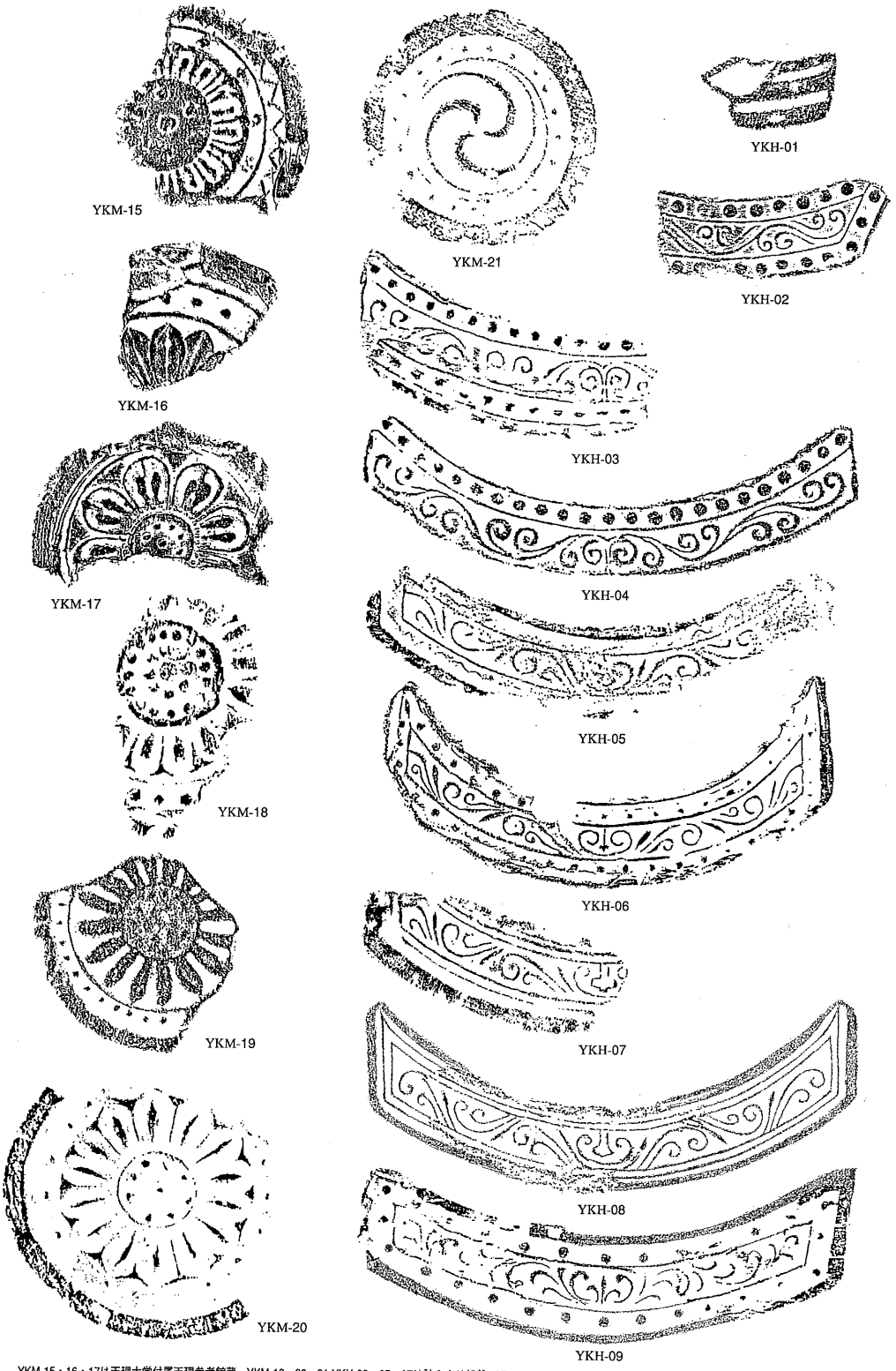
ＹＫＭ－03は単弁蓮華紋軒丸瓦である。ＹＫＭ－01に似るが、蓮弁幅が不揃いな点、外縁が太い点が異なる。

ＹＫＭ－01と類似したものは奥山廃寺[33]（図10の１）、中宮寺[34]等に出土例がある。ＹＫＭ－01はこれらに比して中房が一回り小さい点が異なるが、これらとほぼ同時期の七世紀前半のものと考えられる。ＹＫＭ－02・03はＹＫＭ－01に比して蓮弁に盛り上がりがある点、瓦当が厚手である点からＹＫＭ－01より後出的と考えられるが、いずれにしろ二種ともに七世紀前半のものと思われる。



YKM-01は田中利弘氏蔵　YKM-02は島軒満蔵　YKM-03は黄振安氏蔵　YKM-04・05・08・09・12・14は註９より転載
YKM-06・07・13は天理大学付属天理参考館蔵（YKM-07の薄拓映は註125より転載）　YKM-10・11は名古屋市博物館蔵（薄拓映はともに註82より転載）

図７　横井廃寺出土軒瓦集成（１）　(1/4)

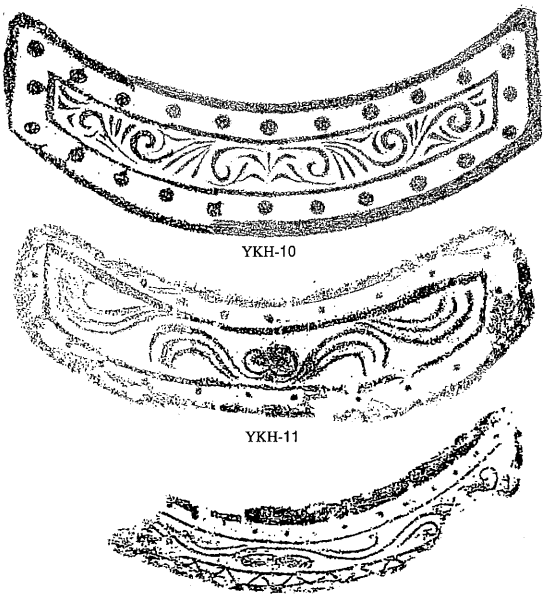


YKM-15・16・17は天理大学付属天理参考館蔵　YKM-18・20・21,YKH-03・05・07は註９より転載　YKM-19,YKH-01は島軒満蔵　YKH-04・06は島軒満蔵品と註９のものを二片合成し転載　YKH-08は常楽寺美術館蔵（薄拓映は註82より転載）　YKH-09は島軒満蔵品と註９のものを三片合成し転載（薄拓映は註82より転載）　YKH-02は京都国立博物館蔵

図８　横井廃寺出土軒瓦集成（２）　(1/4)

ＹＫＭ－04は単弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮子１＋６である。桜花状の蓮弁で弁中央に稜を持つ。図５の４・５はこれと同笵である。蓮子数が異なるが、類似したものに和田廃寺例が知られる[35]。紋様構成が似かよることから、七世紀後半の塔基壇造立以前の年代が与えられている和田廃寺例とＹＫＭ－04は同じ頃のものと思われる。

ＹＫＭ－05は単弁十六弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮子１＋６＋12である。弁中央が薬研状に窪み、覗花弁を持つ点、弁間に珠点を置くのが特徴的である。図５の8～10はこれと同笵である。櫟本廃寺例[36]は同笵の可能性が高い。蓮子を二重に巡らす点などの意匠から七世紀後半のものと思われる。



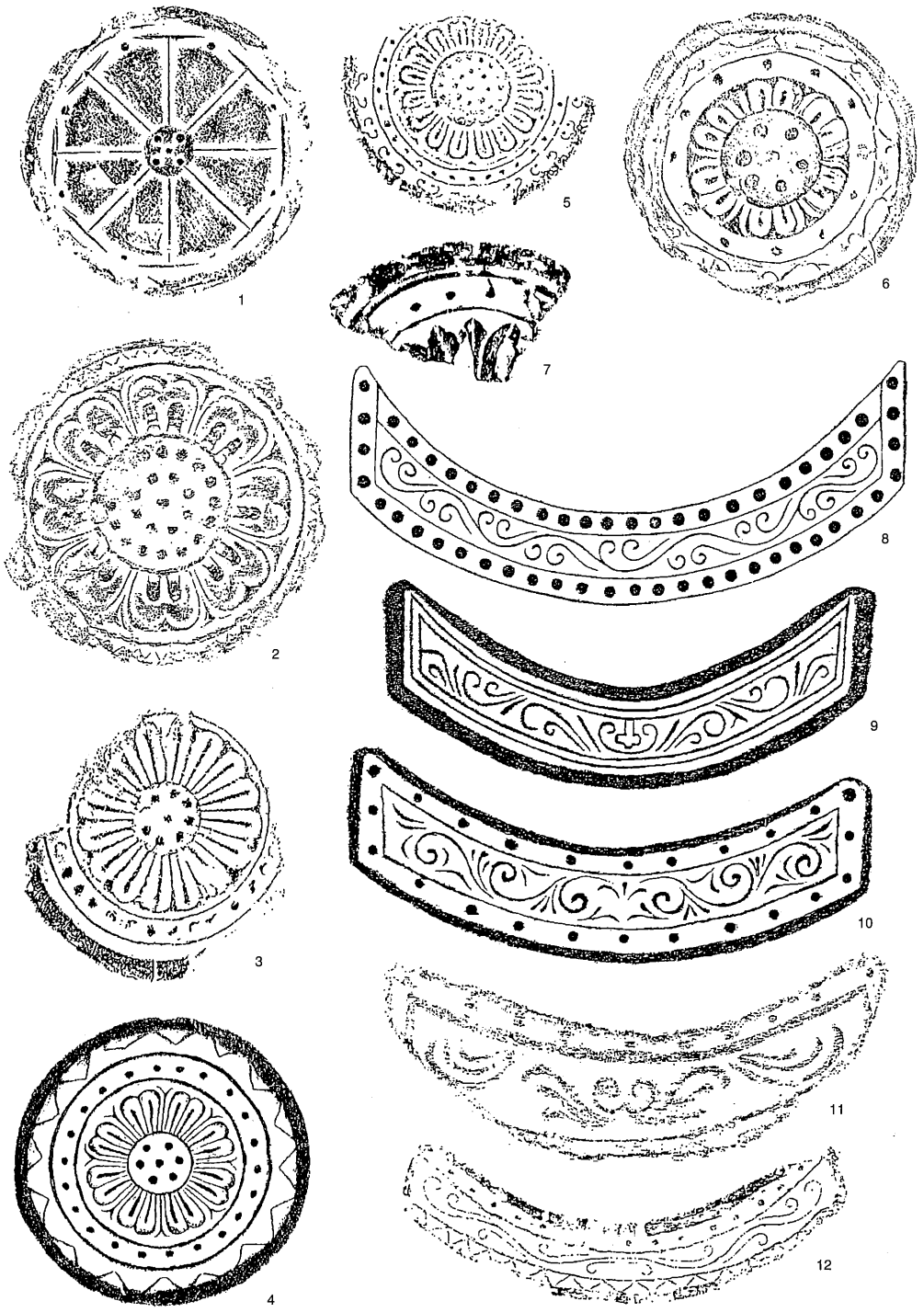
YKH-10は島軒満蔵（薄拓映は註82より転載）　YKH-11は天理大学付属天理参考館蔵（薄拓映は大安寺出土品）　YKH-12は註９のものを二片合成し転載

図９　横井廃寺出土軒瓦集成（３）　(1/4)

ＹＫＭ－06は複弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。外縁に細かい線鋸歯紋を巡らす。法隆寺37Ｅ[37]（図10の２）と同笵かと思われたので、実物照合を行った[38]。結果、ＹＫＭ－06は37Ｅに比して中房圏線が細い点、子葉幅が狭い点、線鋸歯紋が長い点が異なっており異笵であることが判明した。37Ｅは七世紀後半の年代が与えられている[39]。37Ｅに紋様が酷似していることから、ＹＫＭ－06の年代は、37Ｅとほぼ同じ頃と思われる。なお、本資料は横井廃寺採集品として知られている[40]が、実物のマーキングには「八島寺」とある。横井廃寺は「八嶋寺」と呼称されたこともあったようである[41]。

ＹＫＭ－07は複弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮子１＋６＋９である。外区に圏線を巡らせる。法隆寺に同笵例があり、法隆寺では35Ｂと型式設定されている。35Ｂは法隆寺西院伽藍創建時の補足瓦と考えられており、七世紀後半から八世紀前半の年代が与えられている[42]。なお、本資料は横井廃寺採集品として知られている[43]が、実物のマーキングには「八島寺ノ北岩淵寺」とある。「八島寺ノ北岩淵寺」と書かれていることからすると、この軒瓦の採集地は横井廃寺ではなく、「岩淵寺」かも知れない。

ＹＫＭ－08は単弁十六弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮子１＋８である。蓮子に周環を持ち、外縁に面違鋸歯紋を巡らす点が特徴的である。図５の11はこれと同笵であろう。6128Ａ[44]と同笵である。6128Ａは平城京西一坊坊間路西側溝（右京八条一坊十一坪[45]）から出土してい



1.奥山廃寺出土瓦（ⅡA、註33より転載）　2.法隆寺出土瓦（37E、註125より転載）　3.乙訓寺出土瓦（OM-4、註49より転載）　山陵瓦窯出土瓦（6308D、註82より転載）　5.三山木廃寺採集瓦（註57より転載）　6.法隆寺出土瓦（63B、註125より転載）　7.平城薬師寺出土瓦（72、註106より転載）　8.藤原宮出土瓦（6643C、註82より転載）　9.平城薬師寺出土瓦（6663K、註82より転載）　10.平城薬師寺出土瓦（6763B、註82より転載）　11.法隆寺出土瓦（242F、註125より転載）　12.平城薬師寺出土瓦（246、註106より転載）

図10　参考軒瓦　(1/4)

る。川原寺例[46]も同笵の可能性が高い。外区面違鋸歯紋、蓮子に周環を持つという特徴から、いわゆる川原寺式軒丸瓦の単弁化したものと考えられる。しかし、いわゆる川原寺式軒丸瓦に比して、蓮子が一重であること、および蓮弁の意匠から後出的なものと思われ、七世紀末頃から八世紀前半の年代が考えられる。

ＹＫＭ－09は単弁十六弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮子１＋６＋８である。細長い蓮弁で、放射状に延びる間弁が界線状に巡る。図５の６・７はこれと同笵である。中山廃寺例[47]と同笵かと思われたので、実物照合を行った[48]。結果、３箇所で笵傷が一致し、同笵であることが判明した。ＯＭ－４[49]（図10の３）と型式設定されている乙訓寺出土軒丸瓦との紋様の類似が指摘されている。ＯＭ－４は八世紀前半と考えられている。ＯＭ－４はＹＫＭ－09に比して蓮子が一重である点から後出的で、ＹＫＭ－09の年代はそれ以前の、七世紀後半から八世紀前半のものと考えられる。

ＹＫＭ－10は単弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮子１＋４である。外区に大振りの線鋸歯紋を巡らす点が特徴的である。蓮弁の一箇所に半月状の紋様があることから、6127Ａと同笵であることがわかる。6127Ａは平松廃寺、平城京東市推定地[50]、平城京右京五条四坊三坪[51]などに同笵例がある。

ＹＫＭ－11は単弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。ＹＫＭ－10に似るが、蓮弁はいわゆる重弁形式のものである。外区鋸歯紋の間に界線から縦にのびる凸線が入るところが一箇所あることから、6127Ｂと同笵であることがわかる。6127Ｂは姫寺廃寺、平松廃寺[52]、壺坂寺[53]に同笵例がある。

ＹＫＭ－12は複弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮子１＋６である。外区内縁珠紋、外区外縁線鋸歯紋である。蓮子、蓮弁、珠紋の位置関係、珠紋数22であることから6308Ｄ（図10の４）の可能性が高い。

ＹＫＭ－13は複弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮子１＋７である。間弁と蓮弁中央の凸線無く、子葉は輪郭線で囲む。平城宮出土6316Ａと同笵かと思われたので、その原寸大拓本とＹＫＭ－13の実物を照合した[54]。結果、6316Ａと異笵とする根拠はなかった。6316Ａは他に平城京左京二条二坊十三坪[55]などに同笵例がある。6316Ａは八世紀中頃の年代が与えられている[56]。

ＹＫＭ－14は単弁十六弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮子１＋８＋16である。外区外縁に二種類の宝相華紋を巡らす点が特徴的である。京都三山木廃寺例[57]（図10の５）は同笵の可能性が高い。外区外縁に宝相華紋を使用することから、八世紀後半から九世紀前半のものと考えられる。

ＹＫＭ－15は複弁蓮華紋軒丸瓦である。石田氏は弁数を八弁と考えている[58]が、六弁であろう。蓮子１＋６である。間弁の端は弁端に接する。内区と外区を分かつ界線は無い。興

福寺出土例[59]は同笵の可能性が高い。法隆寺63B[60]（図10の６）と内区紋様は酷似するが、外区外縁がＹＫＭ－15が線鋸歯紋で、法隆寺63Ｂが唐草紋である点が異なる。興福寺例は永承元年（1046）の焼亡層から出土しており十一世紀中頃以前と考えられている[61]。法隆寺63Ｂは十世紀前半から十世紀後半の年代が与えられている[62]。以上の先学の成果から、ＹＫＭ－15は十世紀前半から後半にかけてのものと考えられる。なお、本資料は横井廃寺採集品と知られている[63]が、この実物のマーキングにも「岩淵寺」とあり、横井廃寺のものではない可能性もある。

ＹＫＭ－16は単弁蓮華紋軒丸瓦である。小片のため詳細は不明であるが、蓮弁はＹＫＭ－05と同様に、中央が薬研状に窪み、覗花弁を持つ。外区内縁に珠紋帯がある点ＹＫＭ－05と異なる。平城薬師寺出土例[64]（図10の７）は同笵の可能性が高い。平城薬師寺出土例は平安時代のものとされている[65]。なお、本資料は横井廃寺採集品と知られている[66]が、実物のマーキングには「八島寺」とある。

ＹＫＭ－17は複弁蓮華紋軒丸瓦である。弁数は八弁、蓮子は１＋８という[67]。中房の周りに雄蕊と思われる楕円珠紋を巡らす点が特徴的である。同類型のものは他に例が無いが、雄蕊に注目して、雄蕊帯のできる前の十世紀頃のものと考えられる。なお、本資料は横井廃寺採集品と知られているが[68]、実物のマーキングには「八島寺」とある。

以下ＹＫＭ－18～20までは、白鳳時代から平安時代にかけてのものであろうが、小片であり、紋様構成が特異であるので詳細な年代が不明のものである。

ＹＫＭ－18は単弁蓮華紋軒丸瓦である。弁数は十六弁という[69]。蓮子１＋８＋16である。

ＹＫＭ－19は単弁十六弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮子を二重に巡らす。間弁無く、外区内縁に小粒の珠紋を密に巡らせる点が特徴的である。

ＹＫＭ－20は単弁十四弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮子１＋８である。蓮弁・間弁ともに著しく高く隆起している点が特徴的である。珠紋を縦断する笵傷からみて、図５の14はこれと同笵であることがわかる。

ＹＫＭ－21は三巴紋軒丸瓦である。巴は左巻きで、巴の頭部は互いに分離する。巴の尾部は圏線にとりつかず珠紋の外側には圏線が無い。実物を実見していないため詳細な時期は不明だが、ここでは鎌倉時代後半から室町時代にかけてのものと考えておく。

ＹＫＨ－01は三重弧紋軒平瓦である。第１弧線に比して、第２、第３弧線が若干太い。七世紀中頃から後半のものと思われる。

ＹＫＨ－02は左に偏行する偏行唐草紋軒平瓦である。上下脇外区珠紋である。6643型式（図10の８）であろう。6643型式を参考にして、ＹＫＨ－02の年代は七世紀後半から八世紀前半と考えられる。Ⅱ章でも述べたように、ＹＫＨ－02はＹＫＭ－09と組み合う可能性が考えられている[70]。

ＹＫＨ－03は三回反転均整唐草紋軒平瓦である。上下外区に珠紋帯がある。蕨手を背中合わせにしたような特異な中心飾りが特徴的である。

ＹＫＨ－04も三回反転均整唐草紋軒平瓦で、ＹＫＨ－03に似るが、上外区にしか珠紋帯が無い。ＹＫＨ－03の下外区珠紋帯を、脱笵後に切り落としたものとも考えられる。図４の２、図６の16～18はこれと同笵である。小山廃寺（紀寺）に同笵例[71]がある。ＹＫＨ－04は顎の深さが10cm以上ある段顎で、凹面に模骨痕があることから、七世紀末頃から八世紀前半の年代が考えられる。前述したようにＹＫＨ－02はＹＫＭ－09と組み合う可能性が考えられていた。しかし図５の７の胎土、焼成、色調が、図６の16・18と似ており、両方とも同じ時期と考えられることから、ＹＫＭ－09とＹＫＨ－04が組み合う可能性が高い。

ＹＫＨ－05は三回反転均整唐草紋軒平瓦である。外区に線鋸歯紋を巡らす点が特徴的である。平城京東市推定地出土6659Ａ[72]と同笵かと思われたので、ＹＫＨ－05の原寸大拓本と照合を行った[73]。結果、6659Ａと異笵とする根拠はなかった。6659Ａは他に姫寺廃寺、平松廃寺[74]、山田寺[75]、乙訓寺[76]、平城京右京七条二坊十四坪[77]などに同笵例がある。6659Ａは6668型式と同様に中心飾りの花頭形垂飾り下端が左右に尖っており、内区唐草の紋様も似かよることから6668型式の外区線鋸歯紋のものと解することができよう。6668Ａ・Ｂともに八世紀前半のものと考えられていることから、6659Ａも八世紀前半のものと考えられる。また6659Ａの出土場所を見ると、いくつか6127Ａ・Ｂ（ＹＫＭ－10・11）と共通する。6659Ａは外区に線鋸歯紋を巡らすことが特徴的であるが、6127Ａ・Ｂも外区に大振りの線鋸歯紋を巡らすことが特徴的である。以上のことから6127Ａ・Ｂは6659Ａと組合うことが考えられる。さらにこのことから6127Ａ・Ｂの年代も6659Ａと同じく八世紀前半のものと考えられよう。なお、6127Ａ・Ｂ－6659Ａが出土する場所は、奈良時代以前の創建の寺院遺跡とその周辺である[78]ということには今後注意すべき点であろう。

ＹＫＨ－06は三回反転均整唐草紋軒平瓦である。逆十字形の中心飾りで、上下外区と脇区の間に杏仁形の珠紋を置く。図６の19～20はこれと同笵である。6682Ａと同笵かと思われたので平城京左京二条四坊二坪出土例[79]と実物照合を行った[80]。結果、笵傷が一致し、6682Ａと同笵であることが判明した。6682Ａは他に奈良山51・52号窯[81]、平城宮[82]、平城京左京二条二坊十二坪[83]、平城京右京一条北辺二坊三・四坪[84]、唐招提寺[85]、西大寺[86]、西隆寺[87]等に同笵例がある。6682Ａの年代は八世紀前半から中頃と考えられている[88]。6682Ａについては、平城京内の出土例、出土量からみて補足・補修瓦的な性格と主体瓦としての性格の二面性を持っていることが指摘されている[89]。6682Ａは平城京内では6308型式と組み合うので、ＹＫＨ－06はＹＫＭ－12と組み合うのであろう。

ＹＫＨ－07は三回反転均整唐草紋軒平瓦である。外区に二重に郭線を巡らせる。内区の唐草紋様は6663Ｋ（図10の９）に似るが、左第１単位の支葉の伸び方、左第３単位支葉が

右に曲折しない点などが異なる。6663Kの年代は八世紀中頃以降のものと考えられている[90]ことから、ＹＫＨ－07もこれとほぼ同じ時期、八世紀中頃から後半のものと考えられる。

ＹＫＨ－08は三回反転均整唐草紋軒平瓦である。ＹＫＨ－07に似るが主葉、支葉の巻の大きさがほぼ同じという点などが異なる。6663Hと同笵かと思われたので平城京左京四条二坊七坪出土6663H[91]と実物照合を行った[92]。結果、中心飾り、唐草の形状から同笵であることが判明した。6663Hは他に平城薬師寺[93]、平城京左京四条二坊十六坪[94]、平城京左京三条二坊十六坪[95]、河内国分寺[96]等に同笵例がある。6663Hの年代[97]から、ＹＫＭ－08は八世紀中頃から後半と考えられる。

ＹＫＨ－09は三回反転均整唐草紋軒平瓦である。逆小字形の中心飾りである。図４の22はこれと同笵である。6725Aの可能性が高いと考え、唐招提寺出土6725A[98]の原寸大拓本と、照合を行った[99]。結果、6725Aと異笵とする根拠はなかった。6725Aは他に高麗寺[100]、平城薬師寺[101]、丹波国分寺[102]に同笵例がある。6725Aは唐招提寺金堂の創建瓦と考えられており、八世紀後半の年代が与えられている[103]。ただ、6725Aは笵傷進行からみて、平城京諸大寺から丹波国分寺へ笵型が移動したとみて誤りはないと考えられており、丹波国分寺で製作されたのは平安時代初頭と考えられている[104]。横井廃寺の6725Aは小片であるが、笵傷が少なく奈良時代につくられたものと考えられる。

ＹＫＨ－10は三回反転均整唐草紋軒平瓦である。逆小字形の中心飾りの下に松葉状対葉花紋を飾る。興福寺出土6763Cと同笵かと思われたので、実物照合を行った。結果、興福寺出土例と３箇所で笵傷が一致し、6763Cと同笵であることがわかった[105]。また興福寺出土例に比して笵傷が進行していることが確認できた。6763Cと紋様構成が似る6763B（図10の10）の年代は八世紀後半と考えられており[106]、6763Cもこれと同じ頃と思われる。

ＹＫＨ－11は二回反転均整唐草紋軒平瓦である。双頭渦紋の中心飾りで、唐草が左右２回反転である点、上外区界線が太い点が特徴的である。大安寺例[107]と同笵かと思われたため、実物照合を行った。結果笵傷、上外区界線が太い点が一致し、同笵であることが判明した[108]。異笵であるが同類型のものが法隆寺にあり、242F（図10の11）と型式設定されている[109]。242Fは十世紀前半から後半にかけてのものと考えられていることからＹＫＨ－11も同じ頃のものと思われる。本資料は横井廃寺採集品と知られている[110]が、実物のマーキングには「中臣寺」とある。

ＹＫＨ－12は三回反転均整唐草紋軒平瓦である。唐草の主葉は中心から左右に連続して流れる。上外区に珠紋、下外区に線鋸歯紋が巡る。平城薬師寺に同笵の可能性の高いものがあり、246（図10の12）と型式設定されている[111]。古市廃寺例[112]、大安寺例[113]も同笵の可能性が高い。246は薬師寺天禄の火災（973年）後の再建軒平瓦245の小型のものと解されており、十世紀後半から十一世紀前半のものと考えられている[114]。

これら以外に横井町の水越真澄氏が横井廃寺にて表採されたと伝わるものを所蔵している。(図11) これは四回反転均整唐草紋軒平瓦で、対向二重C字形の中心飾りが特徴的である。古市廃寺出土6768A[115]と同笵かと思われたため、実物照合を行った結果、同笵であることが判明した[116]。6768Aは他に音如ヶ谷瓦窯[117]、平城京左京二条二坊十三坪[118]、法華寺[119]、法華寺阿弥陀浄土院[120]に同笵例がある。6768Aは八世紀中頃の年代が与えられている[121]。この瓦の採集者は水越氏の祖父で、亡くなられているため詳しい採集状況は判らなかった。ただ6768Aは横井廃寺の近くにある古市廃寺所用軒瓦であることが指摘されており[122]、本採集品も古市廃寺出土の可能性も考えられる。横井廃寺で6768Aが出土するということに関しては今後の調査に期待することとして、ここでは「横井廃寺軒平瓦」としない。

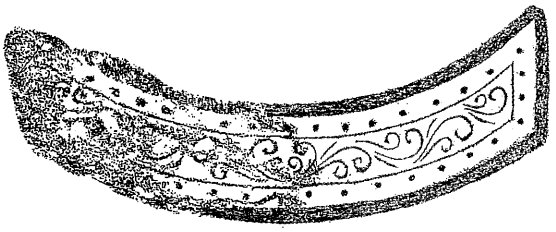


図11　水越真澄氏蔵軒平瓦　(1/4)

以上が現在知り得る横井廃寺採集軒瓦であるが、掲載書には横井廃寺採集となっているのにもかかわらず、実見した際には上述したように別寺院跡採集品かとも思われるマーキングが施されている資料がいくつかあることが判った。これらの資料は、未だ発掘調査が行われていない現在、慎重に扱わねばならないものであろう。

次にこれら軒瓦についての考察を進めていく。

年代の特定できる軒瓦を時代別に並べてみると図12のようになる

Ⅱ章でも述べたように飛鳥時代の軒瓦が少ないことから、創建は飛鳥時代であろうが、造営工事が本格的に始まり、一応の完成をみたのは白鳳時代になってからと指摘されている。しかし最近採集された資料を加えると、飛鳥時代の軒丸瓦は4種類、白鳳時代の軒丸瓦は5種類でほぼ同じくらいであることが判る。また、飛鳥時代のものと思われる鴟尾が採集されていたことが明らかになった。これらのことから飛鳥時代から本格的に造営工事は始まり、おそらく金堂は飛鳥時代に完成していたと考えられる。

また飛鳥時代の軒瓦が出土することからみて、天智・天武朝に創建されたという中臣寺に比定する高橋氏の説は、やはり無理があろう。

飛鳥時代の軒瓦にはＹＫＭ－01・02・03・04がある。いずれも他寺院との同笵関係がないことから横井廃寺所用瓦、すなわち横井廃寺造営のために生産された瓦と考えてよかろう。なお、ＹＫＭ－01の笵を彫り直したものが姫寺廃寺にあることが判明した。姫寺廃寺の調査では、ＹＫＭ－01の笵を彫り直した軒丸瓦は少数しか出土しておらず、ＹＫＭ－01はやはり横井廃寺造営のために生産された瓦で、のち笵が彫り直され姫寺廃寺に供給されたと考えてよかろう。このことから姫寺廃寺造営氏族と、横井廃寺造営氏族は何らかの関

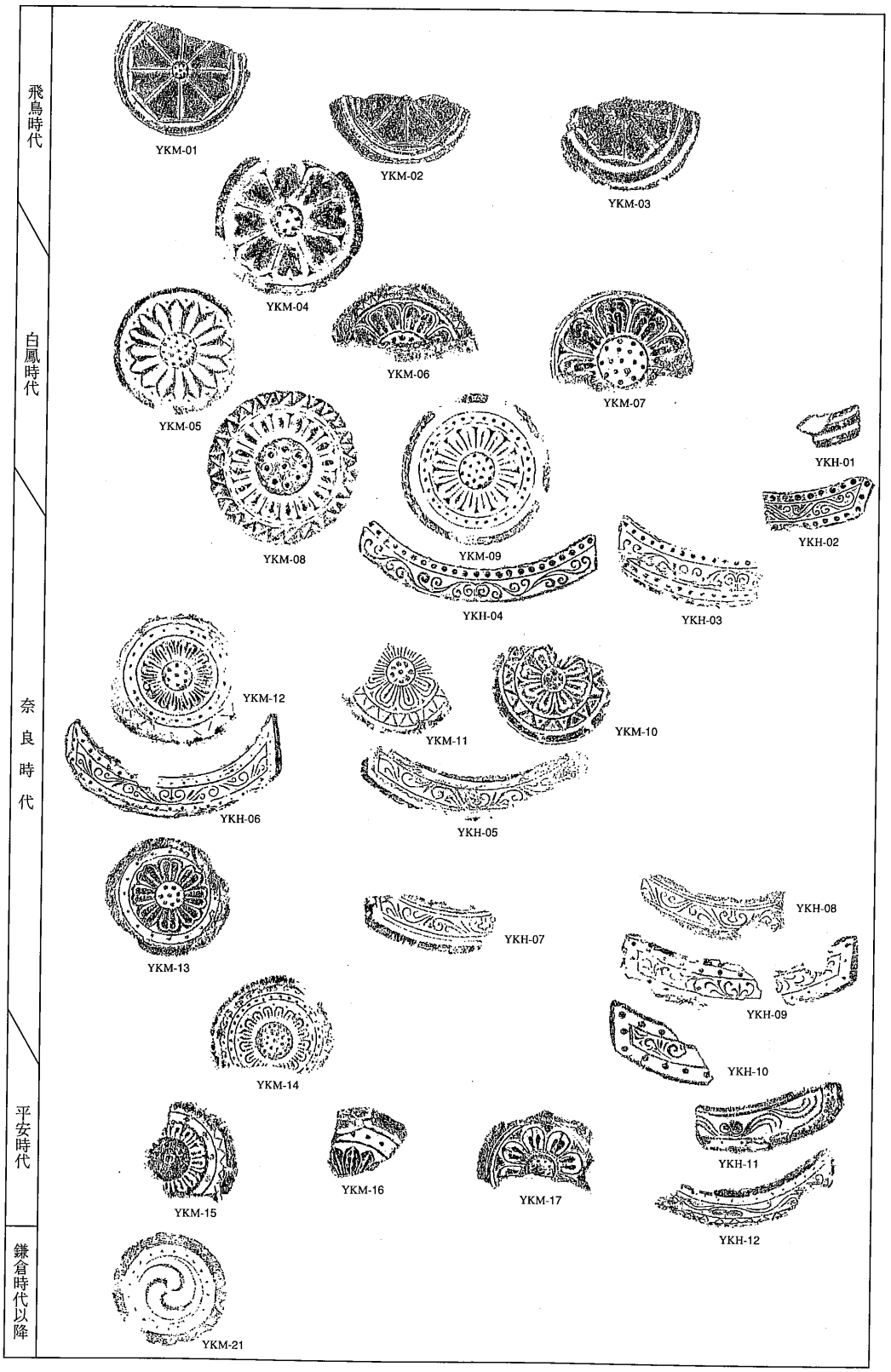


図12　横井廃寺軒瓦編年概略図　（拓本1/8）

係があり、姫寺廃寺造営に際して横井廃寺造営氏族が関与したと考えられる。

白鳳時代の軒瓦にはＹＫＭ－05・06・07・08・09、ＹＫＨ－01・02・03・04がある。このうちその大半が他寺院などで同笵が確認されていない。このことから白鳳時代の軒瓦の大半も横井廃寺造営用と解することができよう。

なおＹＫＨ－04は小山廃寺例と同笵関係にあることが判明している。ＹＫＨ－04は横井廃寺で多く確認されるのに対して、小山廃寺では少ないので、小山廃寺のものは横井廃寺からの供給と考えられる。以上のことから横井廃寺造営氏族は小山廃寺造営氏族とも何らかの関係があり、小山廃寺造営に際して横井廃寺造営氏族が関与したと考えられる。

ＹＫＭ－09は中山廃寺例と同笵関係にあることが判明した。横井廃寺、中山廃寺ともに発掘調査は行われておらず詳しいことがわかっていないので、どちらの主用瓦であるのか判断が難しい。しかしＹＫＭ－09と組み合うＹＫＨ－04が横井廃寺主用瓦と考えられることから、ＹＫＭ－09も横井廃寺主用瓦の可能性が高いと考えられる。

これらに対しＹＫＭ－07は法隆寺35Ｂと同笵関係にあると判明している。ＹＫＭ－07は法隆寺西院伽藍創建の補足瓦と考えられている。横井廃寺では、現在まで報告されている資料から、ＹＫＭ－07は１点しか採集されていないことがわかる。以上のことからＹＫＭ－07に関しては法隆寺からの供給と考えられる。

以上から飛鳥・白鳳時代の軒瓦の同笵関係を概観すると、飛鳥・白鳳時代には横井廃寺造営氏族が横井廃寺造営用軒瓦を生産し、他寺院造営にも協力したことがうかがわれる。

奈良時代の軒瓦を見ると、前代とは対称的に、横井廃寺造営用と思われる瓦は見い出せなくなる。このことは白鳳時代が終わるまでに横井廃寺の造営が完了したためと考えられる。奈良時代の軒瓦にはＹＫＭ－10・11・12・13・14、ＹＫＨ－05・06・07・08・09・10がある。これらの大半は平城宮・京、平城京内諸大寺と同笵で、平城宮・京、平城京内諸大寺で主体的に用いられているものである。

これらのうち6682Ａ（ＹＫＨ－06）が修理用瓦的性格を持った瓦であることからみて、これら奈良時代の軒瓦は、官および平城京内諸大寺の瓦生産所から横井廃寺の修理用として供給されたと考えられる。このことについては二通りの考え方ができる。

一つはこれは律令制度の確立に伴う造営氏族の官人化のため、主に官が氏族寺院の修理・維持に関わったことの表れと推察できる。

もう一つは、横井廃寺の造営氏族が造宮省、造宮職、造平城京司、木工寮、修理職、平城京内諸大寺の各造寺司などの造営事業関係の役職にあり、その関係から供給されたことと考えるものである。

平安時代の軒瓦にはＹＫＭ－15・16・17、ＹＫＨ－11・12がある。平安時代の軒瓦をみても、横井廃寺主用軒瓦というべき多数のものは見いだせず、興福寺、薬師寺など諸大寺

の軒瓦と同笵のものが多いことが判る。このことから平安時代にはいると、横井廃寺の修理に興福寺、薬師寺など諸大寺が関与したことがうかがわれる。横井廃寺はこの頃には興福寺、薬師寺など諸大寺の末寺あるいは寺外別院となり、興福寺、薬師寺などの諸大寺によって修理・維持されていた可能性も考えられる。

横井廃寺軒瓦で最も新しいものはＹＫＭ－21の巴紋軒丸瓦である。詳細な時期は不明であるが、鎌倉時代から室町時代にかけてのものと考えられる。それ以後の軒瓦は現在までのところ確認されていないためこの頃以降廃滅したのであろう。「ヤケモン（焼門か)」という字名が残っていることから、火事で焼失し、廃滅したとも考えられる。

Ｖ　おわりに

以上述べてきたように、本稿では横井廃寺について主に軒瓦から考察を行った。しかし、本廃寺については発掘調査が行われていない現在、採集資料を使用して論を進めていったことから、今後さらに検討する必要があろう。しかし、最近の表採資料から長期間疑問視されてきた紋様塼の出土地が確定したことなどを含め、横井廃寺の軒瓦について考える上での基礎的資料を整理、紹介することができたと思う。

なお、横井廃寺から直線距離にして西へ1.6㎞の横井町内に満願寺という寺院が存在する。（図１）前住職によると満願寺の前身寺院は横井廃寺であり、横井廃寺が雷火によって炎上したため、現在の場所に移建したという[123]。満願寺の造営年代は堂内に安置されている仏像光背銘から室町時代と考えられている。また、近年まで横井廃寺から運んできたという礎石が境内に存在したという[124]。横井廃寺が満願寺の前身寺院ということついては、寺伝などの史料が無いため信じ難い。しかし、焼亡したと伝えることが、「ヤケモン（焼門か)」という字名からの横井廃寺の廃滅原因の解釈と合う。また横井廃寺が軒瓦の年代から、鎌倉・室町時代頃廃滅したと考えたが、廃滅時期と満願寺建立時期がほぼ同時期で、焼亡後に移ってきたということが年代的に矛盾がない。横井廃寺すぐ南に地蔵院川が流れ、その下流に満願寺が存在しており、移建するのに川を利用したとすると、適当なところに所在する。さらに横井廃寺の所在地はもと東市村字横井領で横井廃寺周辺が西方にある横井町の飛び地であったことから、満願寺は移建してからも旧伽藍地であった場所を所有していたため、飛び地として残ったとも考えられる。以上、満願寺は横井廃寺であった可能性を考えてみたが現状では推論の域を出ない。しかし、本稿で示しておくことは今後、横井廃寺について考えるときの材料になるであろうと思い提示した次第である。

なお、近年横井廃寺が所在するこの丘陵地帯にも急速に宅地化が進んでおり、石田氏推定中門跡、塔跡が住宅化していたことがわかった。（図３）発掘調査が行われていないこ

の寺院遺跡が、その実態解明以前に破壊されることが無いように、調査、保存策を早急に講じる必要性を強く感じた。

本稿を執筆するにあたっては、次の機関、方々に御助言、御教示、御協力頂いた。記して感謝致します。(五十音順)

京都国立博物館、興福寺、常楽寺美術館、第一書房社、天理大学附属天理参考館、名古屋市博物館、満願寺、太田三喜氏、梶山勝氏、鎌中俊行氏、鎌中麻紀氏、黄振安氏、田中利弘氏、中井公氏、西川廉行氏、長谷川晋平氏、半田孝淳氏、水越真澄氏、宮崎正裕氏、薮中五百樹氏、山崎信二氏、山前智敬氏

また、拓本の作成にあたっては、角谷和美氏、板東剛子氏の御協力を頂いた。記して感謝致します。

註

1）横井廃寺の場所は藤原町内の北東にあるが、所在地名は横井町字堂所である。しかし横井町は寺院遺跡の西方にある。寺院遺跡は藤原町内横井町飛び地に所在している。

2）保井芳太郎「五三　中臣寺（横井廃寺）」『大和上代寺院志』大和史學会　1932および石田茂作「横井廃寺」『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉讃会　1936

3）高橋健自「中臣氏の氏寺及びその遺址」『歴史地理８－１』日本歴史地理学会　1906

4）榧本亀次郎「大和添上郡発見の金銅佛等について」『考古学雑誌第17巻第５号』考古學会　1927

5）山村廃寺はドドコロ廃寺とも呼称される。横井廃寺の南に位置する。岸熊吉氏によって塔跡が調査された。石造相輪が発見されている。岸熊吉「ドドコロ廃寺跡出土石造相輪等の調査」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査会第10回報告』1928

6）保井芳太郎『大和古瓦圖録』圖版二十九（二）大和史學会　1928

7）石田茂作編『古瓦図鑑』番号八、二三、八五、四三七、四八八　大塚巧芸社　1930

8）保井芳太郎「五三　中臣寺（横井廃寺）」『大和上代寺院志』大和史學会　1932

9）石田茂作「横井廃寺」『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉讃会　1936　第一書房復刻　1977

10）岩井孝次『古瓦集英』岩井珍品屋　1937

11）福山敏男「中臣寺」『奈良朝寺院の研究』高桐書院　1948

12）『朝日新聞奈良版』昭和35年１月24日（日）号

13）当時の新聞では「古市町に飛鳥朝の寺院跡か」となっている。これは採集者の西川氏によると、横井廃寺は古市廃寺に近接しているため、横井廃寺は古市廃寺の別院ともいうべきもので、同じ一つの寺院遺跡と解し、新聞発表したためという。

14）奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター『飛鳥白鳳寺院関係文献目録　埋蔵文化財ニュース40』1983　の古市廃寺出土のものと紹介されている軒丸瓦と同一である。

15）鴟尾の部分名称・用語に関しては奈良国立文化財研究所飛鳥資料館『日本古代の鴟尾』1980に準拠した。

16）奈良国立文化財研究所飛鳥資料館「１史跡飛鳥寺跡（法興寺・元興寺）」の飛鳥寺跡Ｂ『日本古代の鴟尾』1980

17）奈良国立文化財研究所飛鳥資料館「61高丘３号窯跡」『日本古代の鴟尾』1980

18）中井公「寺の瓦と役所の瓦－古市廃寺の出土瓦を中心に－」『季刊考古学第34号特集古代仏教の考古学』1991

19）京都国立博物館『瓦と塼図録』図版15・16・51便利堂　1974

20）奈良市教育委員会「横井窯跡群の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和59年度』　1985

21）森郁夫「横井廃寺」『続・瓦と古代寺院』六興出版　1991

22）なお、研究史文中で述べなかったが、他に横井廃寺についての文献がある。主に横井廃寺、出土瓦の略述に留まるもののため、ここで下に記す。なおすべて「横井廃寺」と呼称している。

奈良国立博物館『飛鳥白鳳の古瓦』東京美術　1970

常楽寺美術館『半田孝海蒐集古瓦図版目録』　1972

梶山勝ほか「奈良県内出土の瓦について」『名古屋市博物館（仮称）準備年報昭和50年度NO.3』名古屋市教育委員会　1976

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『大和考古資料目録　第6集』1978

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『大和出土の国宝・重要文化財』1980

佐野美術館『仏教美術入門展』　1988

奈良国立博物館『特別陳列　山辺の道の考古学　古墳・祭祀遺跡・仏教遺跡の出土品』　1992

奈良国立博物館『奈良国立博物館蔵品図版目録考古篇仏教考古』　1993

23）石田茂作「横井廃寺」図版198-21『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉讃会　1936

24）石田茂作「横井廃寺」図版198-22『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉讃会　1936

25）岩井孝次『古瓦集英』圖版42-26 岩井珍品屋 1937

26）註9に同じ。

27）註9に同じ。

28）奈良国立文化財研究所『平城京左京八条三坊発掘調査概報東市周辺東北地域の調査』1976

29）ＹＫＭ－01と姫寺廃寺例との実物照合は奈良国立文化財研究所にて、山崎信二氏、宮崎正裕氏立会いのもと行った。

30）註20に同じ。

31）石田茂作「横井廃寺」図版196-3『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉讃会 1936

32）ただ、ＹＫＭ－01と同じくＹＫＭ－02にも外縁と界線の間に傷が１箇所確認できる。したがって、ＹＫＭ－01を彫り直したものがＹＫＭ－02である可能性もあるが、今後ＹＫＭ－02の完形品の出土を待って再検討すべきと思う。

33）奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部「奥山・久米寺の調査（1989-1次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報20』1990

34）石田茂作「中宮寺」図版117-1『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉讃会 1936

35）大脇潔「飛鳥時代初期の同笵軒丸瓦」『古代97号』　早稲田大学考古学会　1994のＩＨ型式。蓮子数が違うことが指摘されている。

36）奈良国立文化財研究所飛鳥資料館「10.奈良県櫟本廃寺（２）67」『飛鳥資料館図録第24冊 飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察』 1991

37）『法隆寺の至宝　瓦』図27法隆寺昭和資財帳15　1992

38）ＹＫＭ－06と37Ｅの実物照合は1996年12月天理参考館にて、太田三喜氏立会いのもと行った。

39）『法隆寺の至宝　瓦』法隆寺昭和資財帳15　1992では白鳳時代前期（670～690頃）とする。

40）保井芳太郎「五三　中臣寺（横井廃寺）」疏瓦４『大和上代寺院志』大和史學会　1932および石田茂作「横井廃寺」図版196-7『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉讃会 1936

41）京都国立博物館『瓦と塼図録』図版16便利堂　1974の軒丸瓦の裏面のマーキングに「八嶋寺」とあるが、これは横井廃寺のことであると述べられている。

42)『法隆寺の至宝　瓦』法隆寺昭和資財帳15　1992では白鳳時代前期から後期（670～710年頃）とする。
43）保井芳太郎「五三　中臣寺（横井廃寺）」疏瓦５『大和上代寺院志』大和史學会　1932および石田茂作「横井廃寺」図版196-6『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉讃会 1936
44）以下、文中４けたの数字、１つのアルファベットからなる型式番号は奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996　の型式番号を使用している。
45）大和郡山市『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』fig25-2 1984
46）保井芳太郎「弘福寺」図版第15-7『大和上代寺院志』大和史學会　1932
47）保井芳太郎「中山寺」図版第65-3『大和上代寺院志』大和史學会　1932
48）ＹＫＭ－09と中山廃寺例との実物照合は、1996年12月天理参考館にて太田三喜氏立会いのもと行った。
49）中尾秀正「乙訓寺の瓦」『長岡京古瓦集成（向日市埋蔵文化財調査報告書第20集）』向日市教育委員会 1987
50）奈良市教育委員会『平城京東市跡推定地の調査Ⅱ第４次発掘調査概報』1984
51）奈良国立文化財研究所『平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報』第12図－2 1977
52）「七世紀の寺院と平松廃寺」『伏見町史』伏見町史刊行委員会 1981
53）保井芳太郎「壺坂寺」図版第35-2『大和上代寺院志』大和史學会　1932
54）ＹＫＭ－13と拓本の照合作業は、1996年10月天理参考館にて行った。
55）奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』fig17 1984
56）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告ＸⅢ』1991では平城第Ⅲ期（745～757年）前半とする。
57）田辺町教育委員会『田辺町埋蔵文化財調査報告書第３集　田辺町遺跡分布調査概報』1982
58）註９に同じ。
59）興福寺『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』（図版　24-22）1978
60）『法隆寺の至宝　瓦』法隆寺昭和資財帳15　1992
61）興福寺『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』1978
62）『法隆寺の至宝　瓦』法隆寺昭和資財帳15　1992では平安中期Ⅰ（925～995頃）とする。
63）保井芳太郎「五三　中臣寺（横井廃寺）」疏瓦10『大和上代寺院志』大和史學会　1932および石田茂作「横井廃寺」図版196-12『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉讃会　1936
64）奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告（奈良国立文化財研究所学報第45冊）』図版38-72 1987
65）奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告（奈良国立文化財研究所学報第45冊）』1987
66）保井芳太郎「五三　中臣寺（横井廃寺）」疏瓦６『大和上代寺院志』大和史學会　1932および石田茂作「横井廃寺」図版197-17『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉讃会　1936
67）註９に同じ。
68）保井芳太郎「五三　中臣寺（横井廃寺）」疏瓦９『大和上代寺院志』大和史學会　1932および石田茂作「横井廃寺」図版197-16『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉讃会　1936
69）註９に同じ。
70）京都国立博物館『瓦と塼図録』便利堂　1974
71）京都国立博物館『瓦と塼図録』図版59便利堂　1974

72）奈良市教育委員会『平城京東市推定地の調査Ⅰ第1・2・3次発掘調査概報』1983

73）照合は1996年12月、奈良市埋蔵文化財調査センターにて行った。

74）註52に同じ。

75）保井芳太郎「山田寺」図版第12-3『大和上代寺院志』大和史學会　1932

76）『長岡京古瓦集成（向日市埋蔵文化財調査報告書第20集）』図版編第78図21　向日市教育委員会　1987

77）奈良市教育委員会「平城京右京七条二坊十四坪の調査第101次」『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和60年度』　1986の調査で1点出土している。

78）平城京東市推定地は姫寺廃寺、平城京右京七条二坊十四坪調査地は七条廃寺がそれぞれ近くに位置する。平城京右京五条四坊三坪調査地付近には、やや離れている感もあるが平松廃寺がある。

79）奈良市教育委員会「平城京左京二条四坊二坪の調査　第157次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和63年度』1989

80）実物照合は1996年12月、奈良市埋蔵文化財調査センターにて、宮崎正裕氏立会いのもと行った。

81）奈良国立文化財研究所「奈良山53号窯の調査」『奈良国立文化財研究所年報1971』1971

82）奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996

83）奈良市教育委員会『平城京左京二条二坊十二坪奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告書』1984

84）奈良県立橿原考古学研究所『平城京右京一条北辺二坊三坪・四坪』1995

85）奈良六大寺大観刊行会『奈良六大寺大観第12巻唐招提寺』岩波書店　1969

86）奈良国立文化財研究所『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』fig19-225 1990

87）奈良国立文化財研究所『西隆寺発掘調査報告書』PL37　1993

88）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』1991では6308Dと組み合う6682Aは平城第Ⅱ期（721～745年）とする。

89）廣岡孝信「第6章考察第5節北辺坊出土瓦の諸問題」『平城京右京一条北辺二坊三坪・四坪』奈良県立橿原考古学研究所　1995

90）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』1991では平城第Ⅲ期（745～757年）以降とする。

91）奈良市教育委員会「平城京左京四条二坊七坪の調査」『奈良市埋蔵文化財報告書昭和59年度』1985

92）平城京左京四条二坊七坪出土6663Hと常楽寺美術館蔵ＹＫＨ－07の実物照合は1997年2月、長野県常楽寺にて、常楽寺美術館館長半田孝淳氏立会いのもと行った。なお、ＹＫＨ－07は平城京左京四条二坊七坪出土6663Hに比して、紋様がシャープであることから、ＹＫＨ－07の方が先行するものとおもわれる。

93）奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告（奈良国立文化財研究所学報第45冊）』fig.52-214 1987

94）奈良市教育委員会「平城京左京四条二坊十六坪の調査　第136次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和62年度』1988

95）奈良市教育委員会「平城京左京三条二坊十六坪の調査　第187次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成元年度』1990

96）山崎信二『平城宮・京と同笵の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察』1994

97）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』1991では平城第Ⅲ期（745～757年）後半以降とする。

98）奈良県教育委員会『唐招提寺防災施設工事・発掘調査報告書』唐招提寺　1995

99）照合は1996年11月、奈良市埋蔵文化財調査センターにて行った。

100）山城町教育委員会『史跡高麗寺跡（京都府山城町埋蔵文化財報告）』1987）

101）奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告（奈良国立文化財研究所学報第45冊）』fig.54-233 1987

102）註96に同じ。

103）註98に同じ。

104）註96に同じ。

105）ＹＫＨ－10と興福寺出土6763Ｃとの実物照合は1997年１月、興福寺にて薮中五百樹氏立会いのもと行った。

106）奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告（奈良国立文化財研究所学報第45冊）』 1987

107）奈良市教育委員会の史跡大安寺旧境内第27次食堂并大衆院推定地の調査で出土している。

108）ＹＫＨ－11と大安寺例との実物照合は1996年10月天理参考館にて行った。

109）『法隆寺の至宝 瓦』法隆寺昭和資財帳15 1992では242Ｆは平安中期Ｉ（925～995年頃）とする。

110）石田茂作「横井廃寺」図版198-27『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉讃会 1936

111）奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告（奈良国立文化財研究所学報第45冊）』fig.56-246 1987

112）奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告（奈良国立文化財研究所学報第45冊）』fig.55-5 1987

113）奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告（奈良国立文化財研究所学報第45冊）』fig.55-4 1987

114）奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告（奈良国立文化財研究所学報第45冊）』 1987

115）奈良市教育委員会「古市廃寺の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成元年度』1990

116）古市廃寺出土6768Ａと水越氏所蔵資料との実物照合は、1996年６月、水越氏宅にて行った。

117）奈良県教育委員会『奈良山Ⅲ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』1979

118）奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』1984

119）奈良県教育委員会『重要文化財法華寺本堂・鐘楼・南門修理工事報告書』1956

120）奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報1973』1974

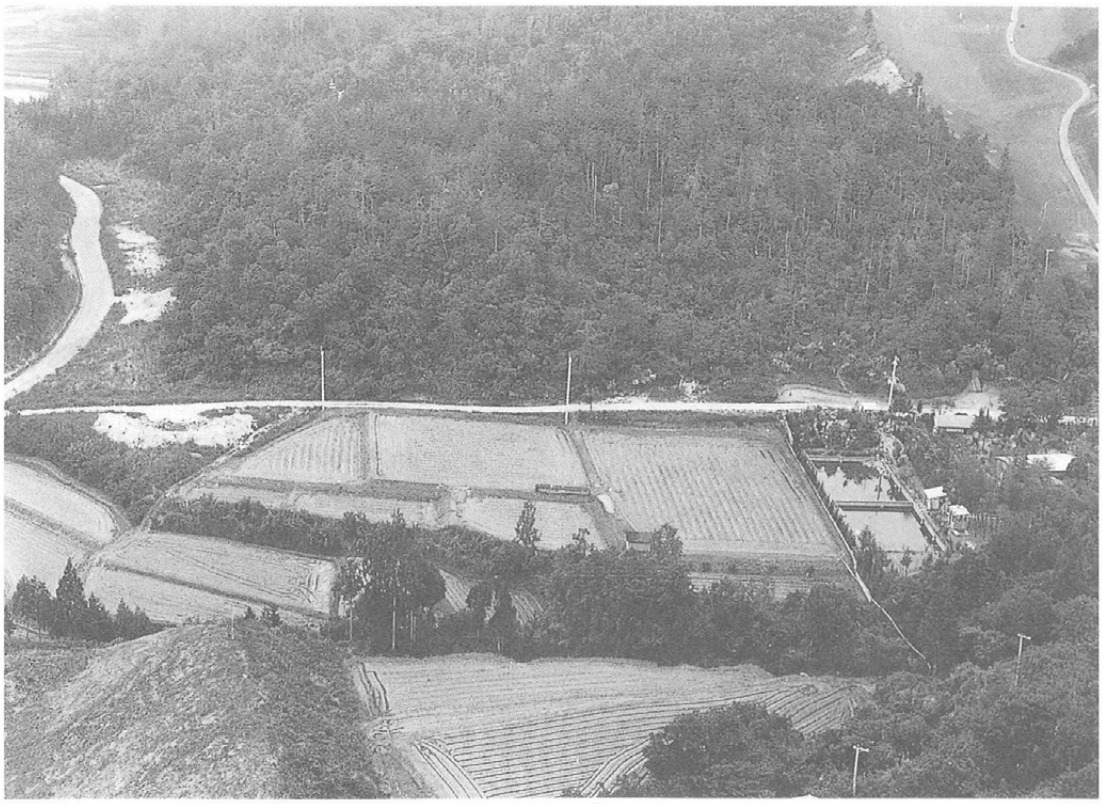
121）註18に同じ。

122）註18に同じ。

123）奈良市史編集審議会『奈良市史社寺編』1985にも元は横井廃寺と書かれている。

124）近年、満願寺本堂南側の防火用水ポンプ格納庫建設の際に、埋められたという。なお、境内にはこれ以外にも礎石らしきものが見られるが、これが横井廃寺から運ばれた礎石だと水越真澄氏から聞いた。

125）奈良国立文化財研究所『南都七大寺出土軒瓦型式一覧（１）法隆寺』1983



1.横井廃寺全景（南から）

2.鴟尾（西川廉行氏蔵）

3.単弁蓮華紋軒丸瓦（西川廉行氏蔵）

4.均整唐草紋軒平瓦（西川廉行氏蔵）

図版2

5.単弁蓮華紋軒丸瓦（田中利弘氏蔵）

6.単弁蓮華紋軒丸瓦（黄振安氏蔵）

7.単弁蓮華紋軒丸瓦（島軒満蔵）

8.単弁蓮華紋軒丸瓦（鎌中俊行氏蔵）

9.単弁蓮華紋軒丸瓦（島軒満蔵）

10.均整唐草紋軒平瓦（島軒満蔵）

11.均整唐草紋軒平瓦（島軒満蔵）

12.紋様塼（島軒満蔵）

奈良市埋蔵文化財調査センター紀要

1996

平成９年３月25日　印刷
平成９年３月29日　発行

発行　奈良市教育委員会
奈良市二条大路南一丁目１番１号

印刷　関西美術印刷株式会社